

やり直し浣腸

敬子は実家の法事で秋田に帰り、昨日戻って来た。久しぶりの実家で羽を伸ばしたのだろう。明るい顔で実家の法事の事を報告した。

親戚が多く集まったので、準備と接待でとても忙しく、てんてこ舞いだっただらう。

田舎の法事は大掛かりだから、大変なことはわかっている。

自分も東北の地方の出身だから、その付き合いの重要さはよくわかる。

特に女達は準備が沢山あって、何日も前から大変忙しくなるのだ。

遠くから来た訪問客は、泊まることにもなるので、その準備もある。

蔵を開けて、布団を干したり、浴衣を用意したり、棚に重ねてある客膳と揃いの食器を出して準備をする。

当日の料理のため食材の買い出しに行き、料理を前々日から始めるのだ。

法事の前日の夜中に準備が終わって寝るのは当然夜中になる。

そんな状況だから、法事が無事に何事もなく終わると、女たちはほっと一安心するが、身体は重く疲れていて、ほとんどの女達は、準備と当日の接待の忙しさで、便秘になっている。

法事が終わった翌日からの何日かは、便所の屑物入れには、潰れたイチジク浣腸の殻がちり紙に包まれて、いくつも入っているものだ。

母親や義姉の昭和の女達は、便秘に浣腸は当たり前のことだったのだろう。

敬子も便秘しては母親の手で浣腸されていたのだろう。

田舎ではイチジク浣腸の使用済みの潰れたピンクの殻は、女がいる家の便所では必ず見られたものだった。

案の定、敬子も法事中はすっかり便秘になってしまったと、思い出す様に話していた。

実家で便秘

私が妻の敬子を連れて、父の三回忌のため、福島の実家に行った時のことだ。

私は次男だからお客様で良かったが、長男をはじめ母や義姉や嫁の敬子はその準備と台所の手伝いや、来客の接待で忙しく働くことになる。

敬子は三日間の滞在の間、トイレに落ち着いて座れずに、どうどう便秘になってしまった。

田舎の便所は、神経質な都会の女性の排便には適していない。

結局のところ便秘になってイチジク浣腸で通じをつけることになってしまう。

「母さん！ どうも敬子が便秘して辛いらしい。

こつちに来てまだ一度も通じがないようなんだ！ 母さん、敬子に浣腸するように言ってよ！」

「あら！ そうなの！ 女は仕方がないのよ！ 忙しくってお通じの事を構ってられないの！

後でゆつくりと思ってるうちにお便秘になるのよ！ ハイ、二つで効くでしょう、後で渡してお

きますよ！」

敬子はそれでも、ここでの浣腸を嫌がった。家に帰るまで我慢すると言って聞かない。

「あなた！ こじや恥ずかしくって！

お義母様にも知られてしまったし、義姉様も居るでしょう！ 家に帰るまで我慢するわ！」

結局そんな事で、翌日の朝、東京に帰るまで、どうどう我慢して自宅へ帰って来たのだった。

やはり自宅に帰るとほっとする。

着替えなどして、やっと居間に落ち着いて敬子にお茶を入れてと頼んだが、

「ちよつと待つて、おトイレッ！」

と言つて出て行つた。便秘のお腹を抱えて、相当我慢していたのだろう。

自宅へ帰つて、やっと安心してトイレが使える。

きつとホツとして便座に座り、気持ちよく排便している事だろう。

しばらくテレビを見ていると、敬子が苦しそうに涙目になって戻つて来た。

「あなた！ どうしてもお便秘出せないの！ あなた苦しくって！ どうしたらいいのッ！」

「お前！ 母さんにイチジク浣腸貰ったんだろう？ もう使ったのか。」

それで！ ダメだったのか？」

「あなた！ ダメなの！ 二つも使ったのよ！ でもお薬だけ出てしまっただけよ！」

アアン、イヤだッ！ お尻に詰まっちゃって出ないのよ！ こんなこと言わせてッ！
もうッあなたッ！ しらないッ！」

敬子は実家での法事の3日間緊張して過ごし、トイレにも長く入れずに便秘になった。

水分も十分取れずに便が硬くなってしまい、肛門を塞いでいるのだろう。

もうイチジク浣腸くらいでは効き目がないようだ。

いつか使おうと田舎から持ってきた薬箱の50ccのシリンジを使って、グリセリン浣腸をしてやるしかないだろう。

再度の浣腸

敬子には、寝室で浣腸の支度をしてるように言っただけで、リビングで一服タバコを吸った。

亭主の実家ではさぞや緊張して便秘になるのも理解出来る。性格が大人しいからなおさらだ。

敬子は薬箱を出し下着になってベッドで待っていた。

薬箱を開けてグリセリンの瓶を出し、敬子にぬるま湯で50%200ccの浣腸液を作ってくるように言い付け、シリンジやネネラトン浣腸管、ワセリンなどを取り出し、ティッシュと共にサイドテーブルに並べて準備した。

「あなた！ お浣腸のお薬できたわ！ これでいいの？ ここにおきます！」

あなた、なんかお医者さんみたいで、恥ずかしいわ……！」

敬子はガラスのメジャーカップに入れた浣腸液をサイドテーブルに置いた。

「あなた！ こんなにいっぱいお浣腸されるのッ！ 三日もお便秘なのよッ！」

やっと帰っておトイレに行けたのに！ あなたにお浣腸されるなんて！ もうッ！

恥ずかしくってッ！」

パンティを脱がせて、ベッドのバスタオルの上で枕を抱かせて尻を高く挙げさせる。

両股をピッタリつけて丸い尻の双丘も合わせている。

淫部や肛門を見せたくないのだろう。

でも股の間に挟まれた厚めの陰唇は、はみ出して見えていて、浣腸の期待からか少々潤んでいるようだ。

ワセリンを指で搦み取り、尻の重なりを開けると、

「ああっ！ あなた…！ イヤンツ」

可愛い声で鳴いた。

奥の肛門に丁寧にワセリンを塗り込み、肛門が緩むように丁寧にマッサージした。

「アアン！ あなた！ もうハヤク！ お浣腸してください！ 感じちゃう！ もうダメンツ」

敬子の陰唇を見ると、愛液が漏れ出し濡らしている。

肛門の中にワセリンを塗り込むと、直腸にある便秘の硬い先端に触った。

これでは自力での排便は難しいだろう。

ゆっくりと多めの浣腸をして、便を柔らかくしなければ、この便秘の排便は難しいだろう。

「あなた！ アアン！ もう苦しいの！ お浣腸、ハヤクお願い…します！」

もっと力を抜いて股を開けと言ったが、イヤイヤをして尻を振った。

尻を割って肛門を指で開き、ワセリンを塗ったネラトン管をゆっくりと敬子の肛門に挿入した。

初めは少し抵抗があったが、先が入ると意外とスムーズになり、15ccほど入ったところで抵抗があった。

直腸の壁が硬い便に当たったのだろう。

シリンジに50ccの浣腸液を吸い上げネラトン管に繋ぎシリンジの中筒を静かに押し注腸を始めた。

「アアン、あなた！ アツ！ イヤツ！ 恥ずかしい！」

敬子は陰唇からまるで涙を流すように急に愛液を溢れさせたが、しかしじっと耐えて大人しく注腸を受け入れている。

管からシリンジを外し、浣腸液を吸い上げ二度目の注腸すると

「あゝッ！ もう！ イッパイ！ お腹いたい！ もう許してッ！ アアンッ！ ウウン！」
四度の注腸で浣腸液は無くなった。

ストレス便秘の解消

ゆっくりとネラトン管を引き抜くと、管は腸液と便に濡れて引き出されてくる。

「ああん！ 恥ずかしい！ お腹いたい！ もう許してッ！ 漏らしそう！

アアッ！ ダメッ」

管を引き出されるとき、排泄感が強く起こるのだろう。

敬子は漏らしそうになって肛門をギュッと締めた。

濡れた肛門をティッシュで押さえ、しばらく我慢させる。

便が柔らかくなるまで、出来るだけ我慢させなくては、また浣腸を繰り返すことになる。

敬子は200ccを受け入れて、激しい便意に襲われて身悶えし、排泄感と戦いを続けている。

「ああアッ！ ダメッ！ 漏れる！ あなたッ！ アッ漏れちゃうーッ！」

尿をちびりながら懸命に肛門を閉めて我慢する。

股間からは尿混じりの膣液が漏れ出し、内股を伝わりシートに広がった。

便意を我慢させている間、敬子の陰唇を分け指で撫で摩り、便意の苦痛を忘れさせようとした

が、敬子は身を揉んで尻を振り、尿を漏らしながら恥ずかしがって、泣き出してしまった。

とうとう限界がきて黄色に色付いた浣腸液が漏れだしてしまった。

押さえた手を離すと腰を屈め身を揉んで、トイレに飛び込んで行った。

どうやら長い便秘でのストレスが解けたのだろう。大きな音を立てて浣腸便を出している。

排便の音がここまで聞こえてくる。

これできつと、敬子は何も無かったように、化粧も直して澄まし顔で戻ってくるだろう。もう日常の敬子に戻っているはずだ。